
3月12日(2)

(森安章人、清水一利・編、SOS! 500人を救え! 3・11 石巻市立病院の5日間、東京、三一書房、2013、p.81-97)

2014年10月10日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

・仲間の死

午前10時30分、休憩室の倒れたロッカーの下で施設担当Tの遺体を確認された。なんとかして遺体を収容したかったが、ヘドロや流出物がうず高く積み重なって、その場所にたどり着くのがやっとで遺体を搬出するのは不可能であった。備蓄食料をいくらかでも持ち出せていたため、はじめ想定されていたよりも多めの食事が配られる見込みとなった。ピンポン球より少し大きなパラパラな状態のおむすび一個で、患者以外の今日の食事はこれだけであったが、特に文句を言うものはいなかった。

・薬を求めて

患者さんが「薬がほしい」と津波情報がまだ出ているなか、牡鹿半島から1人で船に乗り、瓦礫をかき分けて来院された。患者本人にとっては、薬は命をつなぐ大切なものだ。こんな状況でも欠かすことのできない種類のものがあったのだろう。しかし電子カルテメインサーバーが動かず、停電で薬剤部独自システムでも処方内容を閲覧できず、電子化された情報が裏目に出た。そこで、主治医を聞き、PTPシートを鑑別し、手書き処方を作成、散乱した薬品の中から該当の薬剤を探し薬袋に入れ、主治医に処方内容を確認して渡した。

・SOS

海上自衛隊のヘリが屋上の人影を見つけこちらに向かってきた。病院の惨状を伝え患者搬送の依頼をしたが、規則上一般施設への搬送はできないと断られたため、上層部へ依頼があったことを伝えるように約束したが、1日待っても何も起こらなかった。今度は宮城県警のヘリが空き地に着陸し、院長が救助要請と通信手段が必要であることを直接外に行って伝えたが、県からの返答もその日のうちにはなかった。

・運命の明暗

午後になると病院の周囲の水はかなり引き、残った家の土台の上を歩けば相当の範囲で移動が可能だった。海からすぐのところの鉄筋3階建ての看護師宿舎は2階までが津波にやられ、3階だけがかろうじて残っていた。無事であれば3人の看護師が取り残されているはずだったが、1人しか見つからず絶望感が漂った。しかし、かなり後になって残りの2人の無事も確認された。地震直後に病棟師長から「いまから病院に向かう」と連絡を受けたご主人が、安否確認のため徒歩でやってきたが到着していない旨を伝えるとご主人は帰っていった。その後ろ姿に胸がつまった。2年前から毎月繰り返して行っていた地震訓練の成果もあって手術中の対応や患者移送、病棟対応などはスムーズに行われた。基本としていた防災マニュアルには津波の想定は軽く触れられていただけであった。毎回まじめに訓練に参加していた2人がマニュアルを熟知し、それを忠実に遂行して、地震直後に病院にむかったがために津波の犠牲となってしまった。

・父親の気持ち

瓦礫の山を越え、大規模冠水した市街地を渡って、4時間をかけて家から歩いて来た看護師をほかの看護師たちが取り囲み、市街地の様子や自宅近くの様子を熱心に聞いていた。夕回診にて病状が気になる女の子の部屋から始めると、父親が翌日に自宅に帰れないかと聞かれた。家をまだ確認していないようであった。窓から見える景色からすると、見当はつくのだが、自分の目で見ないと諦めがつかないのかもしれない。

・石油タンク

回診を終えてナースステーションに戻ると、石油タンクが爆発する危険があるため患者のベッド移動で看護師が慌ただしく動いていた。プロパンガスの爆発から起こった火事が残ったわずかな家を次々と燃やしていった。午後5時になると、辺りはすっかり暗くなった。ドーンという爆発音とともに、すぐ隣のアパートが燃え始めた。火事を見ても昨日までのように心の痛みは感じなかった。ただ、焚き火を見るかのように茫然と見ていた。

・充電切れ

患者の吸引ポンプの充電が切れる事態が起きた。普段は充電でポンプを作動させることなど、患者を救急車で移送するときくらいしかなく、通常は考えられなかったのである。

・見通し

本部全体ミーティングが開かれ、現在の状況を県警へリ、市役所に伝えたのでこれに期待をかけること、食糧に余裕ができたという前向きな話が出た一方で、水が不足するだろうという悲観的な内容の話もされた。それでも、明日こそ状況が好転するよう期待して、全員が解散した。ライフラインの途絶えた病院でどう対応していくか、元気な患者やスタッフをいつ帰すのか等早急に考えなければならないが妙案は何も浮かばなかった。

・生と死

ラジオは唯一の情報源で、常時つけたままにしてあった。安否情報の番組で、看護助手の家族の無事が確認され、看護助手にとって何よりも嬉しかったに違いない。入院時より誤嚥性肺炎の程度が重く、一進一退を繰り返していた患者が大震災とは関係なく死亡した。1週間前からこのような結末になることは予告してあったためか、患者の妻は動揺する様子も見せなかった。

【考察】

薬を取りに来るために、津波で命を落とす可能性があるにもかかわらず病院へやってこなければいけないという状況は、生きるために死の危険を冒すという非常に不思議な状況であると感じた。また、まじめに訓練に参加していた2人がマニュアルを熟知し、それを忠実に遂行して、津波により命を落としたのは皮肉な結果であった。このような大きな災害では思いもよらないことが起こる可能性があるため、非常に困難なことではあるがマニュアルに従う一方で、その時々常に変更りゆく状況に柔軟に対応していかなければならないと思った。もちろん訓練等をまじめに行うことが大前提ではある。